

学校支援地域本部と教育委員との意見交換会（意見概要）

1 日時・場所

平成28年7月14日（木） 15：30～17：00 千葉市立磯辺小学校図書室

2 出席者

- ・磯辺地区学校支援地域本部の地域教育協議会メンバー 9人
- ・教育委員 6人

3 意見交換テーマ

学校支援地域本部事業の振り返りと今後の展開について

4 意見概要

学校支援地域本部から現在の活動内容と成果・課題などについて発言の後、教育委員も交え自由な意見交換を行った。

■学校支援地域本部について

- ・磯辺地区は元々地域の結びつきが強く、個々の人達が地域のために活動しているという下地があったからこそ、学校支援地域本部として活動することができている。
- ・学校支援地域本部の効果は二つある。
 - ① 個々の活動が単発で終わるのではなく、継続的に行うことができている。
 - ② 個々の活動で困ったときに助け合える。
- ・現状、ボランティアへ謝礼などは支払っていない。今後、協力者の善意だけで継続していくことは難しいと感じる。取組にかかっている経費を割り出して、予算化すべきだと思う。

■地域の協力者について

- ・子どもたちは家庭でセーフティーウォッチャーや、放課後子ども教室の話をしており、そのことで保護者が活動に興味を持つきっかけになっていると思う。
- ・保護者は、仕事や家庭などそれぞれ事情があるので、活動に協力する日や当日の役割など、出来る範囲で活動してほしいと伝え、義務感を持たないようにしている。
- ・保護者会活動に携わったことで、地域の方が子どもたちのために活動してくれているということを知った。このことは多くの保護者に伝える必要がある。保護者会の広報紙で、セーフティーウォッチャーを紹介するなどの取組を行っている。

■教員の関わりについて

- ・教職員の学校評価アンケートで、「体験活動や地域との交流の充実度」の結果が、保護者・児童に比べて低いのは、27年度以降、研究の教科・領域を本事業と直接的に関連のある「生活科・総合的な学習の時間」から「算数科」へ変更したことで、児童と地域の方との交流を把握する機会が減ったと感じていることが一因だと分析している。

- ・保護者からすると、教職員は一生懸命協力してくれていると思う。教育委員会には、教職員や地域の方の頑張り・成果を認め、そのことを広く周知してほしい。

■中学校区との連携について

- ・中学校区との連携を強化し、意見交換などができる体制を整えていけば、小学校を卒業した後も継続して地域とのつながりを持てるのではないかと考えている。
- ・中学校区と町内自治会の区分が異なるため、複数の自治会と連携する必要があるが、自治会をまたいだ連絡体制がない。連絡体制を作ることも大事だが、ゆくゆくは中学校区と自治会区分を合わせるようにしてほしい。
- ・中学生には地域の行事などのスタッフとして参加してもらっている。地域のために働いている人達を知り、将来的に地域に貢献したいという気持ちを養っていかれたらと思う。

■地域運営委員会との関係

- ・地域運営委員会と、学校支援地域本部（地域教育協議会）は、将来的にはひとつになるべきだと思う。学校を卒業した後も学校へ関わっていく基盤になっていくだろう。しかし、独自に活動したいと考える地域もあるため、地域の意見を聞きながら進めていくべき。

■セーフティーウォッチャーについて

- ・磯辺小のセーフティーウォッチャーは全体で25人程度。児童に顔を覚えてもらい会話をするなど、密なコミュニケーションがとれている。そのため、数が多ければ良いというものでもないと思う。単なる見守り活動ではなく、家庭や学校のほか、地域での人間関係を築いていける効果もある。
- ・危険個所には2、3人体制で立っているのも、一人休んでも問題は無い。保護者も手伝ってくれている。1カ月間程度の短期見守りボランティアも採用している。自分が出来る範囲で、無理のない活動をしてもらうよう心掛けている。

■放課後子ども教室について

- ・放課後子ども教室に協力する保護者は、日頃から学校や地域の方々にお世話になっていると感じているため、恩返しのような気持ちで協力している人が多い。
- ・子どもが飽きないようなプログラムを導入すること、指導者の高齢化による後継者不足が課題である。
- ・磯辺小の放課後子ども教室は地域指導員のみで活動しているが、生涯学習振興課の紹介による企業等への委託も検討している。しかし、参加人数が多いことと活動場所の確保が課題。
- ・現在、放課後こども教室のモデル事業として、NPO 法人が実施するプログラムを行っているようだが、お金をかけてプログラムを継続するだけではなく、お金が無くても全地域に分配できるような成果（新たな知恵、方法など）が得られることを期待している。
- ・運営のために外部の人が入ってきたとしても、手伝えることは手伝いながら、交流を図っていきたい。